



Title	Investigation of the reliability and validity of the Japanese Deliberate Self-Harm Inventory
Author(s)	大平, 泰子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69736
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (大 平 泰 子)	
論文題名	Investigation of the reliability and validity of the Japanese Deliberate Self-Harm Inventory (日本語版the Deliberate Self-Harm Inventoryの信頼性・妥当性の検討)
論文内容の要旨	
背景	
自傷行為の概念は多様で、自傷行為に含まれる行動の範囲も様々である。単一項目の質問を用いた自傷の評価では、特定の行動チェックリストによる評価より経験率が低いとの指摘もある。自傷行為についての実証的知見を蓄積していくためには具体的な行動を定量的に把握できる尺度が必要である。本研究の目的は、意図的な自傷行為に関する17項目の自己記入式の尺度であるthe Deliberate Self-Harm Inventory(DSHI)の日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検討することであった。	
方法	
DSHIの日本語版を作成し、その信頼性・妥当性の検討を行った。調査材料として、①DSHI日本語版、②自傷行為に関する質問紙(QSFSB) (岡田, 2002)、また、自傷行為との関連が指摘されている境界性、抑うつ、感情調節について測定するために、③ミロン臨床多軸目録境界性スケール短縮版(MCMI-II) (井沢ら, 1995)、④日本版ベック抑うつ質問票(BDI-II) (小嶋ら, 2002)、⑤感情調節尺度日本語版(ERQ-J) (吉津ら, 2013)を用いた。大学生477名および勤労者27名、計504名に調査用紙を配布し、質問紙の回収は郵送により行った。研究目的、研究方法、個人情報保護、調査への協力・拒否の自由、協力意志の撤回可能性などについて、書面および口頭で説明して研究協力の同意を得た。回収しえた153名分の回答のうち、欠損があった回答等を除外し、149名を分析対象とした。分析対象の内訳は、大学生131名、勤労者18名で、性別は男性58名、女性91名、年齢は18～29歳で、平均年齢は20.5歳 (SD=2.3) である。再検査信頼性の検討については、追跡が可能であった大学生を対象として、質問紙調査を実施した3～4週間後に、DSHI日本語版を再度実施した。初回の調査と2回目の調査の両方を回収しえた45名を再検査信頼性の分析対象とした。分析対象の内訳は、大学生45名、性別は男性9名、女性36名、平均年齢は21.1歳 (SD=0.5) である。	
結果	
DSHI 日本語版の 17 項目の自傷行為のうち 1 つでも「はい」と回答した項目があったかどうかで 2 分割(Dichotomous DSHI)すると、自傷行為の有経験者は 149 名のうち 25 人(16.8%)であった。「はい」と回答した場合に 1 点を与えて得点化すると(DSHI Frequency score)、得点の範囲は 0～5 点、最頻値は 0 点、平均は 0.29 点(SD=0.78)であった。有経験者は「切る(6.7%)」が最多で、次いで「ひっかく (5.4%)」「刺す (4.0%)」であった。Cronbach の α 係数は、0.57 であった。修正済み項目合計相関は、17 項目のうち 10 項目で有意な相関がみられた。1 回目と 2 回目の得点の相関を算出したところ、Dichotomous DSHI($\Phi=0.734, p<.001$)、DSHI frequency score($r=0.839, p<.001$)のいずれについても有意な相関が認められた。DSHI 日本語版の妥当性を検討するために、他尺度との相関を求めた。QSFSB、MCMI-II、BDI-II は、DSHI の Dichotomous DSHI、DSHI Frequency score のいずれとも有意な相関が認められた。QSFSB の下位尺度では、特に「暴力」や「血」の下位尺度において相関係数が高かった。	
考察	
自傷行為の経験があると回答した人が原版より少なくCronbachのα係数ではあまり高い値は得られなかったが、再検査信頼性については十分に高く原版と同程度の再検査信頼性を有する尺度と言える。測定しようとする構成概念をどの程度適切に反映しているか、収束的妥当性、弁別的妥当性によって検証した。QSFSB下位尺度のなかでは、「暴力」や「血」といった因子で示される直接的に身体を傷つける自傷行為と特に密接に関連することが確認された。衝動性や無謀傾向など自傷行為と関連する項目を含んでいるMCMI-IIとも、有意な相関が認められた。DSHI日本語版は原版と同程度の収束的妥当性を持つと言える。弁別的妥当性については、より緩やかな関連を示すと思われる抑うつ症状、感情調整との関連を検討した。DSHI日本語版は、QSFSBやMCMI-IIよりもBDI-IIやERQ-Jとの関連が弱く、DSHI日本語版の弁別的妥当性を概ね支持する結果であった。以上から、DSHI日本語版は、原版と同程度の再検査信頼性、収束的妥当性および弁別的妥当性を持つ尺度であることが示された。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (大 平 泰 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	小 坂 浩 隆
	副 査	教 授	三 邊 義 雄
	副 査	准教授	荒 木 友 希 子

論文審査の結果の要旨

自傷行為の概念は多様で、自傷行為に含まれる行動の範囲も様々である。単一項目の質問を用いた自傷の評価では特定の行動チェックリストによる評価より経験率が低いとの指摘もある。自傷行為についての実証的知見を蓄積していくためには具体的な行動を定量的に把握できる尺度が必要である。本研究は、意図的な自傷行為に関する17項目の自己記入式の尺度であるthe Deliberate Self-Harm Inventory(DSHI) (Gratz, 2001)の日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的に行われた。

翻訳逆翻訳の手続きを経てDSHIの日本語版を作成し、作成したDSHI日本語版の信頼性・妥当性の検討を行った。調査材料として、①DSHI日本語版、②自傷行為に関する質問紙(QSFSB) (岡田, 2002)、また、自傷行為との関連が指摘されている境界性、抑うつ、感情調節について測定するために、③ミロン臨床多軸目録境界性スケール短縮版(MCMI-II) (井沢ら, 1995)、④日本版ベック抑うつ質問票(BDI-II) (小嶋ら, 2002)、⑤感情調節尺度日本語版(ERQ-J) (吉津ら, 2013)を用いた。大学生477名および勤労者27名、計504名に調査用紙を配布し、質問紙の回収は郵送により行った。回収しえた153名分の回答のうち、欠損があった回答等を除外し、149名を分析対象とした。再検査信頼性の検討については、追跡が可能であった大学生を対象として、質問紙調査を実施した3-4週間後に、DSHI日本語版を再度実施した。初回の調査と2回目の調査の両方を回収しえた45名を再検査信頼性の分析対象とした。

DSHI日本語版の17項目の自傷行為のうち1つでも「はい」と回答した項目があったかどうかで2分割(Dichotomous DSHI)すると、自傷行為の有経験者は149名のうち25人(16.8%)であった。「はい」と回答した場合に1点を与えて得点化すると(DSHI Frequency score)、得点の範囲は0～5点、最頻値は0点、平均は0.29点(SD=0.78)であった。有経験者は「切る(6.7%)」が最多で、次いで「ひっかく (5.4%)」「刺す (4.0%)」であった。Cronbachの α 係数は、0.57であった。修正済み項目合計相関は、17項目のうち10項目で有意な相関がみられた。1回目と2回目の得点の相関を算出したところ、Dichotomous DSHI($\Phi=0.734$, $p<.001$)、DSHI frequency score($r=0.839$, $p<.001$)のいずれについても有意な相関が認められた。

自傷行為の経験があると回答した人が原版より少なくCronbachの α 係数ではあまり高い値は得られなかったが、再検査信頼性については十分に高く原版と同程度の再検査信頼性を有する尺度と言える。測定しようとする構成概念をどの程度適切に反映しているか、収束的妥当性、弁別的妥当性によって検証した。QSFSB下位尺度のなかでは、「暴力」や「血」といった因子で示される直接的に身体を傷つける自傷行為と特に密接に関連することが確認された。衝動性や無謀傾向など自傷行為と関連する項目を含んでいるMCMI-IIとも、有意な相関が認められた。DSHI日本語版は原版と同程度の収束的妥当性を持つ。弁別的妥当性については、より緩やかな関連を示すと思われる抑うつ症状、感情調整との関連を検討した。DSHI日本語版は、QSFSBやMCMI-IIよりもBDI-IIやERQ-Jとの関連が弱く、DSHI日本語版の弁別的妥当性を概ね支持する。

自傷行為は青年期における精神保健の問題の一つであり、自殺とも関連する事象であるが、これまで本邦においては自傷行為について評価する標準的なツールがなかった。本研究は、日本語版の自傷行為尺度の作成および信頼性・妥当性の検証を行ったものであり、博士(小児発達学)の学位授与に値する。